

記念すべき20周年！若手映像クリエイターの登竜門 SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2023 全ラインナップ発表！！

スクリーン上映：7/15(土)～7/23(日)

オンライン配信：7/22(土)～7/26(水)

ご担当者各位

2004年から始まったSKIPシティ国際Dシネマ映画祭（主催：埼玉県、川口市ほか）は、国際コンペティション、国内コンペティション（長編部門、短編部門）を中心とした“若手映像クリエイターの登竜門”として毎年開催を重ね、これまでに『死刑にいたる病』の白石和彌監督、『浅田家！』の中野量太監督、『カメラを止めるな！』の上田慎一郎監督、『さがす』の片山慎三監督など、日本映画界のトップランナーとして活躍する監督や、新作を心待ちにされる監督たちを多数輩出してきました。

記念すべき20周年を迎える本年は、スクリーン上映とオンライン配信のハイブリッドで開催いたします。

本日6月14日（水）、神楽座（東京・飯田橋）にて記者発表を行い、コンペティション部門ノミネート作品や特集上映をはじめとする全ラインナップを発表いたしました。

今年のSKIPシティ国際Dシネマ映画祭は、映画祭20周年と川口市制施行90周年を記念して、埼玉県と川口市が共同製作した作品『**瞼の転校生**』のオープニング上映（ワールド・プレミア）で幕を開けます。

“コンペティション”には、過去最多の1,246本の応募作から厳選した24作品がノミネート！すべて国内初上映

国際コンペティションには、102の国・地域から応募された作品から厳選した10作品がノミネート。アゼルバイジャン、シリア、トルコといった日本ではあまり観ることのできない国の作品や、ヨーロッパ、南米そして日本など、世界各国の新鋭監督の力作が揃った珠玉のラインナップ！審査委員長は、数々のヒット映画を手掛けてきた映画プロデューサーの豊島雅郎さんが務め、映画祭期間中の最終審査を経て、グランプリほか各賞を決定します。

国内コンペティションでは、日本映画界の未来を担う若手映像クリエイターが果敢に表現の可能性に挑んだ、長編6作品、短編8作品がノミネート。『チチを撮りに』で2012年の本映画祭長編部門監督賞とSKIPシティアワードを受賞し、その後『湯を沸かすほどの熱い愛』『浅田家！』などのヒット作を手掛け、今や日本映画になくはならない存在となった中野量太監督が審査委員長として凱旋します！

さらに特別上映では、2019年の本映画祭にノミネートされた真田幹也監督が人気マンガを実写化した『**尾かしら付き**』をワールド・プレミアで上映します。「SKIPシティ同窓会」と題した特集では、過去に本映画祭でノミネートや受賞を経験後、大きく飛躍し活躍する**5人の監督（松本優作、まつむらしんご、中村真夕、片山慎三、中野量太）が凱旋！**最新作の上映と、これまでの歩みを振り返るトークイベントを開催します。

また「中国映画の新境地～KATSUBEN Selection～」では、ロカルノ国際映画祭で審査員特別賞を受賞した、チュウ・ジョンジョン監督初のフィクション長編映画『**椒麻堂会**』を日本初上映！

いずれの特集も、世界各国の若手監督を発掘・紹介してきたSKIPシティ国際Dシネマ映画祭ならではの特集です。詳細は次ページ以降の通りです。本年も映画の未来を担う、新たな才能の発掘に取り組んでまいります。ぜひ貴媒体にて本情報をご紹介しますよう、よろしくお願い申し上げます。



オープニング上映

『瞼の転校生』

映画祭20周年・川口市制施行90周年記念作品(ワールド・プレミア)

映画祭の幕開けを飾るオープニング作品。今年は映画祭 20 周年と川口市制施行 90 周年を記念して、埼玉県と川口市が共同製作した『瞼の転校生』をワールド・プレミアで上映します！ 大衆演劇の世界で生きる中学生の少年が、ひと月しか通えない学校でのさまざまな出会いと別れを通じて成長する姿を描く爽やかな友情ドラマ。短編『stay』が2020年の本映画祭国内コンペティション短編部門で優秀作品賞を受賞した藤田直哉監督の長編デビュー作品です。



©2023 埼玉県/SKIP シティ彩の国ビジュアルプラザ 川口市

特別上映

『尾かしら付き。』(ワールド・プレミア)

SKIP シティ彩の国ビジュアルプラザの若手映像クリエイターの支援事業として、埼玉県がユニバーサルミュージックアーティストと共同製作した作品『尾かしら付き。』をワールド・プレミアで特別上映します！ 『ミドリムシの夢』が2019年の本映画祭国内コンペティション長編部門にノミネートされた真田幹也監督が、佐原ミズの人気コミックを実写映画化。小西詠斗、大平采佳、佐野岳、武田梨奈、木村昴、新内真衣らフレッシュなキャストが織り成す、ちょっと不思議で心温まる物語です。



©佐原ミズ/コアミックス ©2023 映画「尾かしら付き。」

国際コンペティション

過去最多1,041本の応募作品から、すべて日本初上映の厳選10作品をノミネート！

今年の国際コンペティションは、102の国・地域から応募された、過去最多の1,041本から、厳正なる一次審査を経て10作品をノミネート。審査委員長には数々のヒット作を手掛けた映画プロデューサーの豊島雅郎さんが就任し、最終審査を経てグランプリをはじめとする各賞が決定されます。

- 『バーヌ』第二次ナゴルノ・カラバフ紛争を背景に、息子の親権を巡って社会的権力を持つ夫と闘う女性を描くアゼルバイジャン作品
- 『エフラートウン』 盲目の女性と写真が趣味の男の恋をレトロな色彩で綴る、トルコ発の切ないラブロマンス
- 『僕が見た夢』 『家(うち)へ帰ろう』で2018年の本映画祭観客賞を受賞したパブロ・ソラルス監督の最新作
- 『イントゥ・ジ・アイス』 気候変動の問題を読み解くため、グリーンランドの氷河を調査する3人の科学者を追ったドキュメンタリー
- 『あなたを探し求めて』 SNSを通じて、自分と同じ障害のある人を探す監督自身の6年間に及ぶ旅路を記録した圧巻のセルフ・ドキュメンタリー
- 『ジェイルバード』 囚人の両親の下に生まれ、刑務所内で育った青年と看守の男の深い愛情を描くハートフルコメディ
- 『助産師たち』 念願叶って“世界で最も美しい仕事”とされる職業に就いた新米助産師たちの奮闘と葛藤のドラマ
- 『マイマザーズアイズ』 『写真の女』で2020年の本映画祭SKIPシティアワードを受賞した新鋭・串田壮史監督が新たに仕掛けるサイコサスペンス
- 『シックス・ウィークス』 高校生の少女が、養子に出したわが子を取り戻せる猶予の6週間に体験する激しい心情の揺らぎを映し出すヒューマンドラマ
- 『この苗が育つ頃に』 紛争の爪痕が残るシリアの村で暮らすヨーグルト売りの父娘と、迷子の少年の1日を描く感動作

戦争や気候変動、社会的抑圧がもたらす問題に向き合った作品や、親子の関係や生命の誕生、あるいはアイデンティティといった人間の根源に迫る、バラエティ豊かな力強い作品が揃いました。**全作品、日本初上映**となります。



『バーヌ』
Banu
監督:ターミナ・ラファエラ
アゼルバイジャン、イタリア、フランス、イラン
©Katayoon Shahabi



『エフラートウン』
Eflatun
監督:ジュネイト・カラクシュ
トルコ
©Karakuş Film



『僕が見た夢』
I Woke Up with a Dream
監督:パブロ・ソラルス
アルゼンチン、ウルグアイ
©Marcelo Iaccarino



『イントゥ・ジ・アイス』
Into the Ice
監督:ラース・オステンフェルト
デンマーク、ドイツ
©Lars Ostenfeld



『あなたを探し求めて』
Is There Anybody Out There?
監督:エラ・グレンディニング
イギリス
©David Myers



『ジェイルバード』
Jailbird
監督:アンドレア・マニャーニ
イタリア、ウクライナ
©Pilgrim Film



『助産師たち』
Midwives
監督:レア・フェネール
フランス
©Geko Films



『マイマザーズアイズ』
My Mother's Eyes
監督:串田壮史
日本
©2023 PYRAMID FILM INC.



『シックス・ウィークス』
Six Weeks
監督:ノエミ・ヴェロニカ・サコニー
ハンガリー
©Sparks Ltd.



『この苗が育つ頃に』
When the Seedlings Grow
監督:レーゲル・アサド・カヤ
シリア

国内コンペティション（長編部門、短編部門）

長編6作品、短編8作品がノミネート。

『チチを撮りに』で本映画祭2012 監督賞 & SKIPシティアワードW受賞の
中野量太監督が審査委員長で凱旋！

日本映画界の未来を担う若手監督の個性が光る力作を厳選！ヒューマンドラマ、SF、コメディ、アニメーションと幅広いジャンルの作品が結集。国内コンペティション長編部門には6作品がノミネート！

- 『地球星人（エイリアン）は空想する』「UFOのまち」石川県羽咋市を舞台に、UFO遭遇情報の真相を追う記者が迷宮に嵌っていくミステリー
- 『ヒエロファニー』静かに静かに常軌を逸していく臨床心理士の女性の日常から、救済の本質を問う哲学系ホラー
- 『繕い合う・こと』父の仕事を継いだ兄と、根無し草のような弟の心のほころびを描く、俳優・長屋和彰の初監督作品
- 『十年とちょっと+1日』地元を離れた3人の男女が十年ぶりに再会したことで始まる風変わりな会話劇
- 『ブルーを笑えるその日まで』学校に馴染めない少女が体験する、不思議なひと夏のファンタジー
- 『泡沫』有名建築家の家に生まれた青年の内に秘めた苦しみと慟哭を美しい白黒映像で魅せる異色作

『ヒエロファニー』のマキタカズオミ監督は、短編映画で2013年、2015年、2019年と本映画祭に過去3回ノミネート、『ブルーを笑えるその日まで』の武田かりん監督は2020年に短編でノミネート。いずれも初長編作品で再びコンペティションに参加します。



『地球星人(エイリアン)は空想する』
監督:松本佳樹
日本
©世田谷セススマンズ



『ヒエロファニー』
監督:マキタカズオミ
日本
©elePHANTMoon



『繕い合う・こと』
監督:長屋和彰
日本
©2023 Kazuaki Nagaya



『十年とちよつと+1日』
監督:中田森也
日本
©中田森也



『ブルーを笑えるその日まで』
監督:武田かりん
日本
©ブルーを笑えるその日まで



『泡沫』
監督:アドリアン・ラコステ
日本
©A SUR LLC

国内コンペティション短編部門には、8作品がノミネート！

- 『恵子さんと私』 ヒト型AIが一般化した日本で、AIと人間の心の関わりを描くSF作品
- 『野ざらされる人生へ』 冴えない男が想定外の展開に空回りする悲哀に満ちた大渋滞コメディ
- 『A nu / ア・ニュ ありのままに』 ホワイトデーの思い出を瑞々しいタッチで綴るアニメーション
- 『ミック』 宝くじを当てて不意に大金を手に入れたホームレスの男の葛藤を描く社会派ドラマ
- 『さまよえ記憶』 行方不明の息子を探す母親が、手掛かりを得るために自身の大切な記憶を差し出す、切ない物語
- 『猟果』 狩猟に出かけたある夫婦のやり取りを通して、家父長制の有害さにユーモアとスリルで切り込む意欲作
- 『寓』 俳優・石原理衣と音楽家・小野川浩幸が共同監督したダーク・ファンタジー
- 『勝手に死ぬな』 急逝した父の秘密を確かめるべく、父の記憶に潜入する家族のロードムービー



『恵子さんと私』
監督:山本裕里子
日本
©山本裕里子



『野ざらされる人生へ』
監督:永里健太郎
日本
©2023kurokishi film



『A nu / ア・ニュ ありのままに』
監督:古賀啓靖
日本
©古賀 啓靖



『ミック』
監督:高濱章裕
日本
©2023「MIMIC」



『さまよえ記憶』
監督:野口雄大
日本
©「さまよえ記憶」製作委員会



『猟果』
監督:池本陽海
日本
©池本陽海



『寓』
監督:石原理衣、小野川浩幸
日本
©オテウデザール



『勝手に死ぬな』
監督:天野大地
日本
©DrunkenBird

特集「SKIPシティ同窓会」 本映画祭から羽ばたいていった監督たちが最新作とともに凱旋！

若手映像クリエイターの登竜門として開催を続けてきた本映画祭からは、これまで、コンペティションのノミネートや受賞をきっかけに、多くの監督が羽ばたいていきました。映画祭 20 周年を記念して、活躍中の 5 人の監督に、最新作とともに再び映画祭に戻ってきていただきます。作品上映後には、トークショーを開催し、監督本人から映画祭参加後の歩みや上映作品の制作の経緯を伺います。



『Winny』 監督: 松本優作

★『Noise ノイズ』
2017 年長編部門ノミネート
©2023 映画『Winny』製作委員会



『あつい胸さわぎ』 監督: まつむらしんご

★『ロマンス・ロード』
2013 年長編部門 SKIP シティアワード
受賞
©2023 映画『あつい胸さわぎ』製作委員会



『ワタシの中の彼女』 監督: 中村真夕

★『ハリヨの夏』
2006 年長編部門ノミネート
©T-Artist



『さがす』 監督: 片山慎三

★『岬の兄妹』
2018 年国内コンペティション長編部門
優秀作品賞、観客賞受賞
©2022『さがす』製作委員会



『浅田家！』 監督: 中野量太

★『チチを撮りに』
2012 年長編部門 監督賞、SKIP シ
ティアワード受賞
©2020『浅田家！』製作委員会

特集「中国映画の新境地～KATSUBEN Selection～」 ロカルノ国際映画祭 審査員特別賞『椒麻堂会』を日本初上映！

映画を語る WEB 番組「活弁シネマ倶楽部」とのコラボレーション企画として、海外で高く評価された日本未公開の作品を上映する「中国映画の新境地～KATSUBEN Selection～」。

奇才チュウ・ジョンジョン監督初のフィクション長編映画として 2021 年のロカルノ国際映画祭国際コンペティションで審査員特別賞を受賞、近年最高の中国映画の 1 本と評される壮大な叙事詩『椒麻堂会』をジャパン・プレミアで上映します。



関連企画

バリアフリー上映、4年ぶりの野外上映など盛りだくさん！

SKIP シティ国際 D シネマ映画祭では、コンペティションや特集上映以外にも、関連企画として多様なプログラムを実施します。

「カメラクレヨン」では、SKIP シティ彩の国ビジュアルプラザの映像学習プログラムと、地元川口市で活動する川口子ども映画クラブの子どもたちが制作した作品を上映。

日本語字幕と音声ガイド付きの「バリアフリー上映」では、第 96 回キネマ旬報ベスト・テン第 1 位、第 46 回日本アカデミー賞最優秀賞主演女優賞に輝いた三宅唱監督の『ケイコ 目を澄ませて』を上映します。

さらに今年は、コロナ禍以来中断していた「野外上映」が 4 年ぶりに復活！アイルランドのスタジオ「カートゥーン・サルーン」が制作した、大人も子どもも楽しめる色鮮やかなアニメーション『ブレンダンとケルズの秘密』と『パフフィン・ロック』を上映します。

主催者、国際コンペティション・国内コンペティション審査委員長 ほか登壇者コメント

記者発表では、主催者の大野元裕実行委員会会長（埼玉県知事）、奥ノ木信夫実行委員会副会長（川口市長）、八木信忠総合プロデューサー、豊島雅郎 国際コンペティション審査委員長、中野量太 国内コンペティション審査委員長、土川勉ディレクター、藤田直哉監督（オープニング作品『陰の転校生』）、の計7名が登壇し、映画祭開催への期待と意気込みを語りました。コメントは以下の通りです。

●大野 元裕 （実行委員会会長／埼玉県知事）

世界初のデジタルシネマ映画祭として始まった「SKIP シティ国際 D シネマ映画祭」が記念すべき20周年を迎えました。昨年に引き続きスクリーン上映とオンライン配信を行うハイブリッド方式で開催します。全国の皆様にこの映画祭を存分に楽しんでいただきたいと思います。コンペティションには102の国と地域から1,246作品の応募をいただきました。これは、コロナ禍で十分に創作活動ができなかった中でも若手クリエイターの情熱が失われていなかったことと、手塩にかけて作り上げた作品を初めて披露する舞台として本映画祭に大きな期待が寄せられていることの証だと考えています。映画祭のオープニングを飾るのは、映画祭20周年と川口市制施行90周年を記念して川口市と埼玉県が共同製作した『陰の転校生』という作品です。監督の藤田直哉さんは2020年に短編部門優秀作品賞を受賞されています。このほか過去のノミネート監督の最新作を上映し、それぞれの監督から本映画祭への思いや参加後の歩みなどを語っていただく特集なども企画しています。本映画祭20周年をぜひ盛り上げていただければ幸いです。

●奥ノ木 信夫 （実行委員会副会長／川口市長）

埼玉県知事も私も川口の出身で、本映画祭を開催させていただき、そして今年で開催20周年という節目を迎えますことを心から感謝申し上げます。川口市制施行90周年という本市にとっても記念の年であり、埼玉県と共同でオープニング作品を製作させていただきました。川口市立高等学校をはじめとする市内各所で撮影されているほか、川口市立高等学校附属中学校の生徒や市民によるエキストラもご協力いただきました。私が会長を務める「SKIP シティ国際 D シネマ映画祭を応援する市民の会」においても皆さんにご協力いただき、市をあげて映画祭を応援しています。開催期間中はJR川口駅西口からSKIPシティへの無料バスも運行するので、ぜひ大きなスクリーンでお楽しみください。

●八木 信忠 （映画祭総合プロデューサー）

今年で20回目となりますが、映画祭の創設当時を思い返すと随分と苦勞をしたことを思い出します。映写機が今ほど良いものではなく、4Kというものもない時代で、デジタルシネマというものが少しずつ姿を現してきた頃です。国際規格に合う鮮明さで上映できるのかどうか、不安も多かったものです。映画といえばまだ「フィルム」の時代に、あえてデジタルシネマのための映画祭を志向し、そのネーミングに「Dシネマ」と明示いたしました。それでも、当時は応募作品のフィルムが送られてきて返送に手間取るようなこともありました。それが今やデジタルは当たり前の中になり、時の流れは速いと実感しております。今年の応募作品も良質な作品が集まっていますので、是非御覧いただければと思います。

●豊島 雅郎 （国際コンペティション審査委員長／アスミック・エース株式会社取締役、映画プロデューサー）

私はアスミック・エースという会社に所属しており、2018年に上田慎一郎監督の『カメラを止めるな!』、2019年に中野量太監督の『長いお別れ』、2022年に片山慎三監督の『さがす』などの制作・配給で携わり、そんなことからSKIPシティ国際Dシネマ映画祭出身監督に縁が深く審査委員長を拝命いたしました。この映画祭は、普段では公開されないような作品や、さまざまな国の監督たちが集まり、皆で作品を鑑賞する非常にアットホームな雰囲気の印象です。20年という積み重ねられた歴史と世界に先駆けてデジタルシネマを打ち出したという、そのご尽力に頭が下がる思いです。昨日の日本記者クラブでの会見で田中泯さんは「作り手が消費者におもねるだけでなく、芸術・文化としての質を向上するものを作っていかなければ駄目じゃないか」というような刺激的な発言をされましたが、私もその発言に感銘を受け、その通りだと思いました。本映画祭もそういった志を持った、世界に誇れる、世界に発信できる質の高い映画祭だと思います。

●中野 量太 （国内コンペティション審査委員長／映画監督（『浅田家!』『湯を沸かすほどの熱い愛』）

2012年に『チチを撮りに』で本映画祭の監督賞をいただき、そこから全てが繋がって現在の位置を切り開いていただいたと思っています。「これでダメだったらもう止めよう」、それくらいの想いで40歳手前くらいになって応募したのが本映画祭でした。藁をも掴むような思いで、どうか見つけてくれと、そんな気持ちを今でも鮮明に覚えています。だから応募される方々の気持ちが痛いほど分かります。と同時に、プロの壁を超えるために何が足りないのか、ということも分かります。その才能を伸ばすための映画祭の一番の役割は褒めることだと思います。僕の自主映画も褒めてもらって何とか頑張れた気がします。僕にしかできないアドバイスが出来れば良いなと思っています。新しい才能に出逢うことを楽しみにしています。

●土川 勉 (映画祭ディレクター)

今年の映画祭の特色は、過去本映画祭にノミネートした監督たちが再度、応募してくれたことがあげられます。海外からも2018年に『ザ・ラスト・スーツ』で観客賞を受賞したアルゼンチンのパブロ・ソラルス監督の作品が再度ノミネートされました。国内作品も日本初上映というハードルがあるにもかかわらず、ご応募いただき多数ノミネートされました。今年も充実したラインアップを揃えました。ぜひ川口市のSKIPシティにお越しいただきまして楽しんでください。もしお越しになれない場合でも、オンラインでぜひご覧ください。

●藤田 直哉 (オープニング作品『瞼の転校生』監督)

私は2020年に『stay』という短編作品で優秀作品賞をいただき、この映画祭に育てられたと言っても過言ではありません。今回、戻って来て大変光栄です。この作品は大衆演劇に所属する裕貴が公演に合わせて一カ月ごとに転校して引っ越してしまう話で、川口市の実際の中学生にエキストラで参加していただいたりもしました。10代の子たちと一緒に映画を作るのが初めてだったので、とても楽しかったです。是非、劇場で観ていただきたいです。『stay』の頃は(コロナの影響で)本映画祭はオンライン開催のみでしたが、今回は初めてのフィジカル上映。直接コミュニケーションが取れたりすることを、大変楽しみにしています。

SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2023開催概要

- 会期：《スクリーン上映》2023年7月15日(土)～7月23日(日)
《オンライン配信》2023年7月22日(土)10:00～7月26日(水)23:00
- 会場：SKIPシティ彩の国ビジュアルプラザ 映像ホール、多目的ホールほか(埼玉県川口市)
- 主催：埼玉県、川口市、SKIPシティ国際映画祭実行委員会
- 公式サイト：www.skipcity-dcf.jp